

【震災募金口座】 振替 00140-9-180881
宗教法人日本バプテスト連盟総務部

福島は今～原発30km圏からのレポート<4> 「二地域居住」

笹子美奈子（目白ヶ丘教会員）

福島県では2017年春、多くの地域で避難指示が解除され、居住制限区域と呼ばれる、日中の立ち入りはできるけれど宿泊はできない地域が大幅に減りました。これに伴い、一部の住民は仮設住宅と原発事故前の自宅を行き来する「二地域居住」を始めています。東京電力福島第一原発から約10kmの場所にオープンしたショッピングモールを訪れると、二地域居住の住民が開店前から集まり、食料品や日用品を購入していました。

ただ、店の様子は事故前と明らかに異なります。スーパーの売れ筋はお弁当とお総菜で、近隣で働く除染作業員が購入しています。三世同居の8人家族が珍しくなかった地域で、スーパーはかつてファミリー用の刺し身や焼き肉の盛り合わせを多く取りそろえていましたが、今では個食用の食材を充実させています。二地域居住は高齢者がほとんどで、子と孫の世代はいわき市や郡山市などの避難先に定住してしまい、食卓を囲むのは1人か2人だからです。

二地域居住する住民が増え、仮設住宅は閑散としています。福島県ではピーク時に約3万3000人が暮らしていましたが、今年4月には1万人を切り、現在は約5400人にまで減りました。いわき市の仮設を訪ねると空き部屋が増え、ポツリ、ポツリと人が住んでいる気配がするという感じでした。お世話になった取材先は留守で、玄関脇

に空の酒瓶がゴロゴロと転がっていました。ひとり暮らしで1年前には「復興住宅の抽選に当たったらここを出てくから、次は新居に遊びに来なさい」と笑顔で言っていたのに心配になりました。ところが翌日東京に戻った後、携帯に連絡がありました。隣町に新居を購入した娘さん夫婦の家に泊まっていたとのことで、今では週2回ほど通い、仮設には週の半分ぐらい帰っているとのことでした。ホッとしました。

ただ、新居も買えず、復興住宅にも移れず、仮設に住み続けざるをえない被災者も少なからずいます。新潟県中越地震で最後の仮設入居者が転居したのは3年後、阪神・淡路大震災でさえ5年後でした。すでに6年が過ぎた福島県の仮設入居者の暮らしはあと何年続くのか。復興の遅れが腹立たしいです。



写真左：福島第一原発から10kmの場所にオープンしたショッピングモール
写真右：スーパーでは除染作業員が弁当を購入する姿が目立つ

2017年震災募金報告 目標600万円 7月累計：137万円

<8～9月 募金者22名・件（受付順、敬称略）> 目白ヶ丘、百合丘、調布、田中晶矩、伊集院、東北連合女性会、古賀、日立、久保祐子、丸亀城東町、相浦光、恵泉、奈良、ふじみ野教会青年会、調布、田中晶矩、小樽、恵、福岡、大村古賀島、書籍販売、大宮

感謝してご報告いたします。引き続きお支援をお願い申し上げます。

菜園の土が・・・

渡邊 光江（福島主のあしあと教会員）

郵送されてきた報告書を見て、夫は、すぐに庭に出て、菜園に植えられた野菜を根こそぎ抜いてしまいました。今年8月の出来事です。枝の先には、きゅうり・なす・トマトもなっていました。

その報告書は、いわき放射能市民測定室たらちねさんに依頼した土壌、野菜等の放射能測定結果でした。土壌は、庭・家庭菜園・雨どい排水口付近から採取しました。除染は2013年秋に、福島市によって住宅の外壁の洗浄と土の入れ替えが行われました。表土を5～10cm削り、ほかから心配のない土を持ってくるというものでした。菜園には、畑用の土が埋め戻されました。その後の報告書にも、放射線量も記入され、終了いたしました。

その翌年、夫は、近くのガーデンセンターに行き、肥料や苗を買い込み、畑作りを始めました。その肥料は、牛ふん・腐葉土でした。苗は元気に育ち多くの実を収穫することができました。この土は除染したんだという安心感があり、何のためらいもせず、その後も、その肥料を投入し、作物を楽しみました。2014年、2015年、2016年と3年間も育ててしまいました。そして、4年目の今年、土壌測定をしたところ、放射能の数値が非常に高くなっていたことに気づいたのです。一緒に測定に提出したきゅうりは、正常値内のベクレルでしたが、土がだめなら、そこになる実もだめと、夫は判断し、即、抜いてしまった訳です。

考えてみれば、原発事故後6年半経た今でも、福島の新聞には、毎日1ページ全体に放射能関連の記事が掲載されています。テレビの画面にも毎日、測定値が出てきます。強い地震がある度に、原発は無事か、車のガソリンは満タンかと心配していたはずなのに、平穏な毎日、いつのまにか、放射能に対する危機感を私から削いでしまったようです。すぐ側に子どもたちがいるのに。

このことを通して、神さまは、これから先、何十年続かわからないこの放射線とのたたかいに、自分で考えて、確かめて、自分なりの生き方をしなさいと、私に教えてくださったように思います。

現地支援委員会より 現地支援委員長金丸真（仙台長命ヶ丘教会）

いつもお祈りとお支えをありがとうございます。東日本大震災から6年半、その間、教会は、初期の炊き出し等の物質支援から、現在は、被災者に寄り添い、分かち合う訪問活動を進めてきました。このことを通して、教会と被災者との信頼関係はより深く培われてきましたが、仮設住宅閉鎖等、住民の方々の環境も大きく変わりつつある今、訪問活動のニーズも変化してきています。ここに紹介します。

変わらないニーズとして、訪問し、懇談などで一緒に時間を過ごすことが求められています。退去者が増えていく中での焦燥感からか、忘れないで、つながりをもっていたいとの思いの表れです。コミュニティ外の私たちにしか言えない様々なことがあり続けて、復興に向けて歩む中で、ほっと一息がつける場が求められています。放射能被害に関しては、安全な食品、子どもの健康管理などについて、気兼ねなく自由に会話できる場として、私たちとのかかわりが求められています。

新たなニーズとして、物質的な支えよりも、精神的な支えが求められています。全体的、平等な支援から、個別的な支援にシフトする必要を感じています。独居高齢者、コミュニティから孤立している方、精神的に追い込まれている方などが個人的な関わりを求めておられると思います。

今後もお祈りとお支えをよろしくお願いいたします。

そして、側にいる子どもたちを、できるだけ放射能の影響から守りなさいと。・・・ 私は、祈ります。

「主よ、あなたに頼るしかありません。私たちをお守りください。放射能の影響が最小限でいられますように、主の道をお示してください。放射能のために住む地を追われている人々の心の中に、イエスさまが入ってくださいますように。一人ひとりをお救いください。また、何千人という方々が、毎日、原発の諸々の処理のために、現地で働いておられます。その方々の健康が守られ、事故が起きませんように。更に、原発事故からの復興のために、お金も与えられますように。原子力の研究も進められ、終末が少しでも早まりますように。何よりも、福島のほかに、原発事故で、こんなに大変な思いをする人々が出ませんように。主よ、まことの道をお示しめしてください。」

これからも、みなさまのお祈りをお願いいたします。